



# 手強い相手

2月10日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 2月10日のおはなし「手強い相手」

久しぶりに店に立ち寄るとマスターが日本酒の壺を抱えてやさぐれている。どうしました、と尋ねると、どうもこうもない、立ち退きだという。立ち退き？ この店が？ そりゃまたどうして。わたしも驚いたが、数人いた常連も口々に、驚いて大きな声を出した。こいつですよ。そう言ってマスターはカウンターに酒壺をどん、と載せた。ラベルには「一日一善」とあった。

\* \* \*

去年のちょうどいまごろのことだった。開店早々、まだ誰も客がいない時間に、見慣れない男がぶらりと入って来た。1杯目はビール、ミックスナッツを注文してひとりカウンターの隅でナッツをぼりぼり齧りながら時間をつぶしている。本を読むでもなく、携帯電話をいじるでもなく、マスターに話しかけるでもなく、おとなしく座って、ナッツを齧り、ビールを口に含む。

間もなく最初のグラスが空いてしまったので、マスターがいかがなさいますかと尋ねると、おすすめのカクテルがあると聞いたがそれをくれと言う。どれもおすすめです。特にどれか一つをおすすめしているわけではございません、いまの気分に合わせてオリジナルをつくることもできますよ。それじゃあ、くよくよした気分を吹き飛ばして、大物になった気分を味わえるのをくれ。

いろいろ考えて「サクセスストーリー」というカクテルを出すと、じっくり味わって機嫌良さにうなずきながら、確かにこれはいい気分になれる。でもちょっと弱いな。このくらいだったら日常でも十分に味わったことがあると、空になったタンブラーを両手にもてあそびながら言うのだ。なるほど。会社を成功させたり、大金を稼いだりという程度のことは体験済みというわけだ。

これは手強い、と感心していたら、もう少し強いのではないかという。そこで「戴冠式」というのを勧めるとこれも飲み干した後、すばらしいと呟きつつも、懐かしい気分を味わえたなどとうそぶく。「戴冠式」が懐かしい、だって？ もっと大物になった気分を味わいたいとの客からの注文を受けて、「ビッグマウス」というカクテルを出すと、不意に改まった口調で、おれのこと覚えていないかと言う。

言われてもなかなか思い出せなかったが、男はマスターの大学時代のゼミの同級生だった。卒業後、コンサルティング会社に勤め、羽振りは良かったものの、いろいろと嫌気がさすことが多く転職を考えはじめたところで実家が傾いた。日本酒の蔵元だった実家は経営難から何もかも手放す寸前に陥っていた。男はただちに会社を辞めると、無駄に稼いだ貯金を全て実家の再建につぎ込んだ。

コンサルティングの仕事で身につけたビジネススタイルは、地元ではひどく新鮮だったらしく強いインパクトを与え、ただちにいくつもの大口の出資者を獲得することができた。伝統的な清酒に加えて、イタリアン・レストラン向けの日本酒や、エスニック料理向けの日本酒を開発し、まず海外で販路を確立した。ローマやバンコックでの成功を前評判に逆輸入したそれらの日本酒はたちどころに成功を収めた。

国内のイタリアン、エスニックの店でも上々の評判で、続けてフレンチ向けの日本酒を開発し、横浜と福岡と神戸と、さらには本場パリにレストランも出し、これも成功させた。海外の権威ある品評会でグランプリを獲得し、すでにバンコックとローマとニューヨークでのレストランの出店も決まっている。一時は自殺まで考えていたらしい両親も、いまは地元で蔵を守りながら悠々自適の生活を謳歌している。

ここまできてふと男は立ち止まった。いつの間にか自分は組織の拡大ばかり考えている。途中までは確かに家を建て直すことが目的だったが、いまはまるで自分の中に住むコンサルティング

会社の勧めに乗って、出資者への配当を拡大し続けること、会社の拡大そのものが目的になってしまったかのようだ。これではまるで辞めたかった会社に戻ってしまったみたいじゃないか。

信頼している職人数人を集めて相談し、3年がかりでひとつの酒を生み出した。出来には自信がある。けれどもこれを生き馬の目を抜くような形で売りたいくはない。ひとくち飲んでみてくれ。おれはこれを飲んだ瞬間にお前のことを思い出した。そして、お前みたいに地に足のついた商売をしているやつにこれを扱ってほしいと思ったんだ。そう言ってマスターの前に出したのがこの「一日一善」だった。マスターは一口飲むなりこれが気に入って、わかった、うちの店で扱うよと言った。男は優しい微笑みを浮かべて、きっとそう言ってくれると信じていた。これはそういう酒なんだよと言いながら、契約書を広げた。

ところがその契約書はまったくのデタラメなものだった。「一日一善」はどこからも届かず、そもそもそんな酒も蔵元もどこにも存在せず、もちろん大学時代の友人の中にそんな男はいなかった。振り込んだ前金が戻ってこなかったばかりか、マスターは気がいたら多重債務者の保証人となっていたのだ。という。

\* \* \*

面白い話だったので、遮らずに最後まで聞かせてもらった。けれどわたしは実は途中から言いたくてたまらなくてうずうずしていたのだ。マスター。なんですか？ それはすごい話だよ。はい、そういうわけでみなさんともお別れなんです。でもそれさバレちゃってるよ。バレちゃってる、とは？ その字、「一日一善」って字、マスターの筆跡じゃん。ぐえ？ ほら。

そう言ってわたしはマスターからもらった名刺を見せた。そこには本人の手書きの文字で「後藤一善」と書いてあった。まわりの常連から、あーっと残念そうなため息が漏れた。マスターはしばらく黙ってにやにやしていたが、やがて耳の上あたりをぽりぽりかいて言った。名刺のことは忘れていたよ。まっつんは手強いなあ。なかなかひっかからないんだから。

(「一日一善」 ordered by ariestom-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## 手強い相手

<http://p.booklog.jp/book/43822>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43822>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43822>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.